

で咲くサクラソウを「ヒマラヤから流れ着いたお姫様」と評した子どもたちがいたことを思い出します。

ところで「田島ヶ原のサクラソウ」は手厚く保護されていますが、「江川のサクラソウ」はどうでしょうか。

☆「サクラソウが残っていますよ」

江川の下流域（桶川市川田谷・上尾市領家）にサクラソウの一大自生地があったことは地元のお年寄りから直接お聞きしたことが何度かあります。小学校の春の遠足は「サクラソウ摘み」だったそうですから。毎年4月にトラスト地のサクラソウを見にこられる桶川市在住の岡野しちさん（88歳）によると、「地平線までピンクに染まっていました」。

この辺りではサクラソウを「野花」と呼び、畦道にもたくさん花を咲かせていたそうです。早い話が「雑草」だったのです。

昭和35年以降、江川の縁に道路ができてからは（埋め立てのため）、トラックが何十台も入ってサクラソウを根こそぎ持って行ってしまったので、「すでに絶滅した」と聞かされていました。

ところが1988年、市民の希望で「上尾市自然環境調査」が実施されている最中、「桶川市にサクラソウが残っていますよ」という情報が桶川市の植物愛好家の方から寄せられました。

☆荒川の三大植物が咲く「秘密の花園」！

早速（財）埼玉県生態系保護協会・副会長のト沢美久先生（植物分類）とご一緒に、教えられた場所へ出かけました。

そこは地目が原野で（原野は開発規制がなにもありません）、広さは約6,000㎡、クヌギの大木に囲まれ、ノイバラやオギなどが背丈よりも高く生い茂っていて、入口がわからないので所かまわず分け入ると、ノイバラに引っかかりたりしてそれは大変でした。

やっと中に入ってチョウジソウの大群落に出会いました。この時私は「チョウジソウ」なる花を初めて見たのですが、青空のような花の色に感動しました。

荒川の代表的な三大植物のうち、「チョウジソウ」と「ノウルシ」の群落はすぐみつかりましたが、お目当ての「サクラソウ」はなかなか見つかりません。「偽情報だったのでしょうか？」と一時落胆しましたが、何度も調査に訪れて、ついにノイバラが生い茂る藪の中にサクラソウの葉を見つけました。「あった、あった！」と一同躍り上がって喜びました。「太陽が当たらないから花が付かないのですよ」とト沢先生から教えられ、すぐに草刈りをしました。

翌春、3月末からはまっ黄色の「ノウルシ」群落。4月中旬には「サクラソウ」のピンク、5月には「チョウジソウ」の青紫、6月に「ノハナショウブ」、7月には「コオニユリ」というような見事な大自然の唇に、私たちは訪れるたびに驚愕したものでした。

私たちはここを「秘密の花園」と名付けました。

調査が進むに従って、江川下流域には埋め立てから逃れ

た貴重な自然が点々と残されていることがわかりました。

☆サクラソウトラスト発足

私たちは江川下流域の貴重な自然を次世代の人々に伝えたいと願い、1990年8月に市民による「サクラソウトラスト」を設立しました。地元の自然保護に理解のある地権者の協力が得られて、地権者と「土地保全協定」（埋め立てをしない約束）を取り交わしてトラスト地が誕生しましたが、たった5アールからの出発でした。

このトラスト活動は辛い活動でした。「土地は金なり」の世相のなかで、私たちの自然を守る活動は地権者の方々には理解が得られ難いものでした。最初にサクラソウの見つかった原野の地権者は7人でしたが、私たちの必死の説得にもかかわらず、一人としてサクラソウトラストへ協力してもらえませんでした。仕方なく一部のサクラソウを隣接地のトラスト地へ移植したりして保全につとめました。

地権者への協力金のための寄付集めも、素人の私たちにとっては相当な負担でした。

☆「秘密の花園」全滅

1993年、はじめてサクラソウを見つけた原野の半分の約3,000㎡が一夜にして産廃捨て場となってしまいました。さらに1995年に残っていた約3,000㎡が同じ業者の手に落ちそうになっていることがわかりました。私たちはこの自然を残そうと関係行政に働きかけましたが、結局はどうすることもできませんでした。一部はすでに無惨に掘り返されていましたが、「植物と表土を移動したい」と交渉して、隣接地のサクラソウトラスト地へ移動しました。業者を頼んだり、私たちの仲間も仕事や学校を休んで、見捨てられた植物を集め、移植しました。「悲しい引っ越し」とつぶやいた中学生の一言が今でも忘れられません。

このようにして残存していた自然の中でも最も貴重な部分は消えていきました。

☆自然の中で汗を流す市民達

しかし、継続的な市民の頑張りで、現在までに17人の地権者と「土地保全協定」を結び、約3ヘクタールの湿地が保全されています。

トラスト地ではサクラソウの咲く環境を守るために、四季折々の作業を市民参加で行っています。

秋が深まるとまずは草刈りからはじまり、原野から草を運び出し、野焼きや耕運作業などが3月まで続きます。

これらの作業は自然を守るイベントとして行うので、一般の方々がトラスト地へ集まってきて青空のもとで汗を流すことで、有意義な休日をご過ごすことができます。お昼には大ナベのとん汁が振る舞われます。

もともとトラスト地では春先までの作業しかありませんでしたが、セイタカアワダチソウやオオバタクサなどの帰化植物がトラスト地に侵入して、在来の日本の植物に悪影響を及ぼすこれらの植物の抜き取りや刈り取り作業で、猛

暑のなかでも働くようになりました。すばらしい植物の開花時にはその苦労も泡のように消えてしまいます。

市民参加のこれらの作業で一番の心配事は「怪我」です。今まで大怪我は起きていませんが、一時に電動草刈り機を10台も動かす時には、私たち運営者は緊張して事故防止のための注意事項の遵守をはかります。

☆止まらない江川流域の埋め立て

江川流域の埋め立てによる自然破壊は今も止まることなく続いています。当然のこととして自然破壊もさることながら、洪水被害の拡大は目に余る状態です。大雨が降れば必ず近くの中学校和高校は休校となり、江川の端の消防署は消防車や救急車の出動もできません。400世帯の大住宅地は冠水し、工業団地からは「機械が冠水して仕事にならない」と苦情が増えています。

「洪水は天災だから補償金などは出ないんですよ」と聞かされたときに、「これは人災ですよ」と思わずつぶやいてしまいました。

なぜ、これほどの事態になっているのに埋め立てはとまらないのでしょうか。

一言で言えば「無秩序な開発」によるものです。開発をすれば産廃や残土が出てくるのは当然のこと、あふれ出たこれらのゴミは低い場所を埋め立てるしかありません。それも首都圏に大規模に残っている谷地は江川流域くらいのもので、ダンプが列をなして残土や産廃を積んできます。

☆「江川流域づくり検討協議会」発足

昨年、国土交通省・荒川上流工事事務所、埼玉県、流域

市町村（鴻巣市、北本市、桶川市、上尾市）、地元地権者代表、それに私たち自然保護団体の構成で「江川流域づくり検討協議会」が発足しました。この検討会では「自然環境の保全」と「洪水被害対策」について、流域全体の視点でよい方向を模索するための議論を進めています。さらに「流域に水を貯留する」という国土交通省も新たな治水対策を目指しています。サクラソウの咲くこの江川流域の自然が、これまで洪水被害を受け止めてきたことを理解することが急がれます。

昨年桶川市は埋め立てをしない地権者へ「協力金」を支払うことを決めました。上尾市も遅ればせながらこの制度を検討しています。

☆サクラソウを守ることは 「モノを大切にすること」

サクラソウを守る一番の特効薬は「人々の意識の変革」です。大量に「モノ」を作り消費すれば、必ず「ゴミ」となります。このような現在の社会システムによって、サクラソウの咲く湿地や谷がゴミの埋め立て地となってしまう。桶川市のある職員の方が「4月から『家電法』が発足しますが、この江川の自然は違法投棄の電機製品に埋まってしまうのでしょうか」と心配されていました。

サクラソウを守るためにも「使い捨て文化」をかなぐり捨てて、「モノを大切に使う」日本本来の文化を取り戻すことが大切です。少しの不便や不自由を我慢することが「サクラソウとの共生」です。

(財)埼玉県生態系保護協会 上尾支部長

田島ヶ原サクラソウ自生地における訪花昆虫

巢瀬 司

1. 夕方の調査

平成10年から3年間、田島ヶ原のサクラソウの訪花昆虫を調べました。私は夜間調査を担当しました。午後6時半を過ぎると暗くなり、観察には懐中電灯が必要になります。夜の田島ヶ原はアブラコウモリが飛び、クビキリギスが鳴く、意外に豊かな自然を感じさせる場所です。ただ、4月の夜の田島ヶ原は寒く、午後7時を過ぎると、昆虫はほとんど活動しなくなってしまいます。そもそもサクラソウは目立つ美しい花を咲かせるのですから、その花が見えない深夜に昆虫が訪花しているとは思えません。そこで、調査は1年目は午後7時半まで、2年目と3年目は午後7時までとしました。

この夕方の調査は3年間で28回、約36時間行いました。この3年間の夕方の調査で、田島ヶ原のサクラソウに訪花

したのは、1998年4月19日午後6時半のホシヒメホウジャクだけでした。ただ、浦和市内に植栽されていたサクラソウへのホウジャク類（ホシホウジャクとホシヒメホウジャク）の訪花は、1998年4月に埼玉大学の佐々木寧教授が観察されており、1999年4月には小築ひかる氏も観察されています。ホウジャク類がサクラソウの花粉媒介昆虫である可能性は高いのですが、田島ヶ原ではその個体数は極めて少ないようです。そもそも、ホウジャク類は昼行性の蛾ですから、夕方は別にして「夜間、田島ヶ原のサクラソウに訪花する昆虫はいない」と結論づけても良いでしょう。

2. 2000年5月の昼の調査

2000年4月下旬に、浦和市東部の寺山に植栽されていたサクラソウで、昼にコハナバチの一種 *Lasioglossum* (*Evylaeus*) sp. が盛んに訪花するのを観察したため、5月

3日に田島ヶ原で昼の調査をすることにしました。当日は晴れで無風、気温は22℃で、第1次指定地ではモンシロチョウやキタテハ、ヤマトシジミ、ギンイチモンジセセリなどが飛んでいました。午前10時50分、第1次指定地でコハナバチの一種がサクラソウの花筒に頭を入れました。田島ヶ原でもコハナバチがサクラソウに訪花するのです。5月1日に、ヒゲナガハナバチの一種の訪花を確認した第2次指定地が気になっていたため、第2次指定地の植栽されたばかりのサクラソウ群落に移動して、本格的な観察を始めました。直後に驚くべき光景に出会いました。コハナバチの一種が頻りにサクラソウの花筒に頭を入れ、ハナアブの一種やヒラタアブの一種もサクラソウの花筒に口吻を入れたのです。11時03分から13時05分までの間に、サクラソウへの訪花を確認した昆虫は、コハナバチの一種 *Lasioglossum* (*Evylaeus*) *sexstrigatum* が4個体で訪花回数は8回、別のコハナバチの一種 *Halictus tsingtouensis* (アトジマコハナバチ) が1個体で訪花回数は4回、ハナアブの一種が1個体で訪花回数は1回、ヒラタアブの一種が1個体で訪花回数は1回、キタテハが1個体で訪花回数は1回、ミヤマチャバネセセリが1個体で訪花回数は2回でした。これほどまとめて田島ヶ原で訪花昆虫が確認されたのは初めてのことです。さらに、このサクラソウ群落の近くの裸地の地面で、コハナバチ類の巣穴が多数見つかり、成虫の出入りも確認できました。

5月8日、第1次指定地の周辺および指定地の中の「道」でハナバチ類の巣穴を数えました。まさか何万人もの人が歩く「道」に巣穴があるとは思っていませんでした。巣穴は盛り土をされた「道」に多く、裸地であること、日当たりの良いことが巣を造る条件になっているようでした。確認したハナバチ類の巣穴は、何と888個でした。

3. 花粉媒介昆虫は何か

田島ヶ原のサクラソウの花粉媒介昆虫は、まだまだ、わからないことばかりです。ただ、3年間の調査を通して、



頭を花筒の中に入れているコハナバチの一種 *Lasioglossum* sp. (2000年4月23日、浦和市寺山にて、巢瀬司撮影)



サクラソウに訪花したコハナバチの一種 *Lasioglossum* sp. (2000年4月23日、浦和市寺山にて、巢瀬司撮影)

私は次のように考えています。

田島ヶ原以外のサクラソウ群落の場合は、クロアゲハ、カラスアゲハ、オナガアゲハなどの黒色系アゲハ類が有力な花粉媒介昆虫になっている可能性があります。これらの黒色系アゲハ類は基本的に林縁で咲く花でしか吸蜜しません。蝶自身が林縁からほとんど出ないのです。したがって過去も現在も、ほとんど樹木のない、明るく開けた田島ヶ原サクラソウ自生地(特に第1次指定地)では、黒色系アゲハ類の訪花が見られないのは当然です。

モンキチョウ、ツマキチョウ、キタテハ、ミヤマチャバネセセリなどの蝶やホシヒメホウジャクなどの蛾が現在の、田島ヶ原のサクラソウの花粉媒介昆虫であることは間違いのないと思います。しかし、田島ヶ原のサクラソウの最も重要な花粉媒介昆虫は、過去も現在も、ハナバチ類でしょう。ただし、そのハナバチはマルハナバチ(トラマルハナバチ)ではなく、コハナバチ類であると思います。

コハナバチ類には午前中にしか、中には早朝にしか訪花しない種がいます。今年(2001年)は私的な調査になりますが、午前中での早い時間帯での訪花昆虫の調査を・・・何とかしたいと思っています。

最後になりましたが、私などにはとてもできないコハナバチ類の同定(種名の決定)は九州大学の多田内修博士にさせていただきました。厚くお礼申し上げます。

(シラサギ記念自然史博物館館長・農博)

さくらそう通信

平成13年3月28日

編集・発行 浦和市教育委員会

浦和市常盤6-4-4

☎048-829-1796



題字 教育長 浅見 匡